中日新聞（夕刊） 2011年（平成23年）3月4日（金曜日）
©中日新聞社 2011 （日刊）

中日新聞 夕刊
発行所 中日新聞社
名古屋市中区三の丸一丁目6番1号
〒460-8511 電話 052(201)8811

紙つぶて

小学生の反抗

森（もり） 郁恵（いくえ）

「女の子らしく」なんていう言葉とは無縁に育てられ、小学校一年生になる時、大好きな黄色のランドセルを買ってもらった。「みんなと違う色だ」と思ったが、優越感も劣等感もなかった。

四年生になると、私にとっての事件が起きた。担任の先生が「家庭科で裁縫をやるので、青とピンクの裁縫箱が必要になる」と言うのだ。男子は青、女子はピンク。そう色を決めて注文すると察知し、とっさに「青いのが欲しい」と口走った。本当はピンクが好き。なのに、先生を傷つけないように気を使いつつ、ウソをついてしまった。「男女の違いで色を決めつけないで！」と心で叫んだ。

子供が最初に遭遇する「社会」は小学校だ。「社会の規律や秩序」を学び、友人や先生の中で自分の立ち位置を知る大切な場所でもある。「裁縫箱の色分け」は、初めて突き付けられた「納得できない女と男の規範」だった。

自由奔放のまま六年生になると、「女らしくしなさい」と諭されるようになった。哲学者ボーボワールではないが、小学生の時期に「女は男より劣る第二の性だ」と刷り込まれるようだった。実存主義もボーボワールも知る由もなかったが、卒業文集に「女らしさ」について作文を寄せるほど悩んだ。

四十年前と今の時代を単純には比較できない。だが今でも「女性を教授にしたら研究レベルが下がる」と公言する男性教授は全国、いやアメリカにもいる。女性受難の時代は、終わっていない。（名古屋大教授）

2011.3.4

2011.3.4 1面 No.8